

出張報告

日時：平成 22 年 3 月 4 日（木）11：00～16：00

出張先：近畿大学・生物理工学部・アリーナ（〒649-6493 和歌山県紀ノ川市西三谷 930）

目的：平成 21 年度大学院 GP 教育成果報告会に参加

● 概要

近畿大学生物理工学研究科では、平成 19 年度に「社会の要求に応える動物生命工学の実践教育」のテーマで大学院教育改革推進プログラムに採択され、今年度でプログラムが終了する。今年度は、予算執行の最終年度となるが、今後の展開を目指すために、近畿大学附属高校の生徒（約 170 名）も招待し、今年度の成果について報告会が開かれた。外部参加者および教員の参加者は全体で数十名程度であった。

● 報告会の進行情況

まず、プログラム代表者である細井美彦教授より、開会の挨拶があり、それに引き続いて仁藤信彦教授から「近畿大学大学院における教育改革」と題して、近畿大学大学院の歴史や生物理工学研究科の目指す理想などについて説明があった。これは、特に、参加者の大部分を占める高校生に対して、大学（学部）を選ぶ際には、大学院進学を含む卒業後の進路についても考えることが大切であることを教示した内容であった。

その中では、近畿大学の理系学部ほとんどが地方分散型であることから、理系大学院の合同シンポジウムを開催し、近畿大学が本質的に持つ課題に気がついたことなどが話題提供として紹介された。典型的な課題として、シンポジウム開催においては、「学生の旅費や親睦会」の経費が計上できず、「バス（大人数移動）のチャーター代や人数の明記できるお弁当」ならば経費で支払うことができるという現状があり、まさに「体育会系大学院」としてのシステムであり、「学術系大学院」としてのシステムが構築できていなかったことが紹介された。もちろん、これに対しては、事務とひざを交えた議論の末、解決でき、現在では「学術系大学院」として発展できるシステムが 1 つでき上がったことなどが説明された。

午前中の残りの時間には、生物理工学研究科で学ぶ大学院生 2 名による大学院での研究生活や研究成果などについて詳細な発表があった。

昼食を挟んでの午後からのセッションでは、各科目での教育・研究成果について詳細な発表があった。紹介された科目としては「専門領域実践英語 1」、「動物生命工学特論」、「研究管理能力開発基礎」、「動物生命工学基礎」、「知的財産及び生命倫理学特論」、「専門領域実践英語 2」、「インターフェース分野別専門家特別講義」、「国内企業インターンシップ」、「海外研究インターンシップ」があった。報告会では、それぞれの科目の担当教員が、科目の目標や講義の仕方について説明があり、それぞれの科目で優秀な成績を収めた学生の発表（5 分程度）がなされた。順次、簡単に列記する。

1. 専門領域実践英語 1 : 日本人英語教員による講義であり「聞き手にとって理解しやすい文章の構築、発音、プレゼンテーション」にポイントを置いた講義がなされているとの旨が教員よりなされ、その後、学生により、「最近の生命科学分野の進歩について」英語でプレゼンテーションがあった。
2. 動物生命工学特論 : 社会人入学した院生に対するリカレント教育としての科目である旨が教員より説明があり、それに続いて、大学卒業後、5年を経過して社会人入学した院生の発表があった。具体的には、本科目によるリカレント教育で復習できて良かった点、社会に出てから再入学したからこそ理解できた内容、社会に出ている間に進歩した生命科学技術について教授して頂き、最先端の生命科学に対してさらに深い興味を持ったことなどについてプレゼンテーションがあった。
3. 研究管理能力開発基礎 : 実際に学内でシンポジウムを立案、実施させ、リーダーシップを身につけるための科目である旨が担当教員から解説があり、院生からは、実際に開催した「動物生命工学の新たな展望」と題するシンポジウムの様子が紹介された。
4. 動物生命工学基礎 : 必須科目である旨、紹介があり、院生からは、海南市に所在する先端生命技術研究所で体験した集中講義の内容を中心に説明があった。
5. 専門領域実践英語 2 : 外国人教員による指導でなされる英語教育であり、実際に海外の学会に参加した場合に必要な Abstract の書き方、参加登録、口頭発表に必要な英語力を身につけるための講義である説明があり、その後、受講した院生により、海外での学会発表を想定した研究成果発表が英語でなされた。
6. インターフェース分野別専門家特別講義 : 実際に社会の色々な分野で活躍しておられる実務家の方を講師として招き、社会との接点を学ぶ講義であることが担当教員から説明され、その後、受講した院生から、NHKで「生き物は地球を救う」や「ダーウィンが来た」のプロデューサーである水沼真澄さんの講義、永井クリニックで体外受精の研究を行っておられる大月純子さんの講義、味の素研究所で唐辛子の研究をして新機能食品を開発した三輪哲也さんの講義など、印象に残った講義について内容紹介と感想が述べられた。
7. 国内企業インターンシップ : 独立行政法人農業生物資源研究所および理化学研究所つくば研究所でインターンシップを体験した院生(2名)の実体験報告がなされた。
8. 海外研究インターンシップ : サウジアラビア王国の King Saud 大学でインターンシップ(クローンヤギの作成)を体験した学生から、実体験報告があった。

その後、国内(8名)および海外(3名)の学会発表で支援を受けた学生の学会報告がされ、実際には、本 GP で国内学会の参加に対して 47 件、海外 6 件の支援をしたことが報告された。

以上のプログラムを全て終え、アンケートに感想などを記入し帰路についた。

●筆者の感想

いずれの発表も 5 分程度と短いものであったが、良くまとまった聞きやすい講演であり、また、発表していた院生もフレッシュマンらしい姿勢で望んであり、素晴らしい報告会であった。さらに追加するなら、「専門領域実践英語 2」の発表者の英語力には目を見張るものがあり、持続した英語教育の必要性を再確認した。

同時に、各科目担当教員の普段のご尽力や、本発表会に対する教育的熱意にも敬意を表したいと感じた次第である。



報告会があった近畿大学生命理工学部の建物風景



アリーナ（会場）の風景